

## 周作人の対日連帯感情

——明治以来の汎アジア主義及び東洋情緒との関係——

趙 京 華

卓越した日本文化理解者である周作人（一八八五—一九六七）の日本観を支えているのは彼の生涯に維持し続けた対日連帯感情である。日本留学経験を持つ人間として、この感情の形成は当然ながら、日本のさまざまな方面と関わっている。結論から言えば、その中で最も重要な関わりは、およそ三つの要素があると考えられる。一つは青年時代の六年間の留学体験、とくに明治の、日露戦争前後から日本国民の間に広がっているアジア意識、あるいは素朴な汎アジア主義という社会思潮の感化。もう一つは明治末年から大正時期にかけての東洋学復興気運の中で現れた、日本人の日本文化研究著作からの影響。そして第三は、永井荷風、谷崎潤一郎らを代表とする日本文人の、「文明開化」の質物性に抗議し、失われた

「文化」を追慕する、いわゆる文学上の「反近代の思想」や伝統回帰に伴って現れた東洋情緒への共感である。大正時期の東洋学の系譜との影響関係について、筆者はすでに別の論文で触れたので、本文ではおもに、第一と第三の要素に注目し、それによって周作人の日本観の根底にある対日連帯感情やその複雑な形成・変化の過程を窺いたい。

周作人の対日連帯感情が彼の日本留学時期、つまり明治末年に流行っている汎アジア民族主義と繋がっていることは、すでに木山英雄氏の『北京苦住庵記』に指摘されている。その指摘によれば、周作人の日本観及び対日感情は日露戦争以来、日本国民の間に広がり、そして志士浪人の支援を受けた清末革命運動の中にもあった、汎

アジア主義の連帯感情とつらなっている。しかし、その後日本人がそれを裏切ったという現実により、その日本観は結局、彼の現実的悲観にしか結びつかず、二十年代から着手してきた「日本研究」も、「賢哲」に代表される文化日本と、「英雄」に代表される軍国日本を統一的に捉えることができず、「精神」と歴史を分裂させたまま<sup>(2)</sup>中断さざるを得なかった、という。木山氏の観点はとくに、周作人の日本観を広範な近代アジアにおける独自の歴史発展の背景の下に置いて観察しながらその複雑な構造を見極めているのである。筆者はこの示唆に富む指摘を受け、さらにその対日連帯感情の形成過程、つまり、汎アジア主義の感化を受けながら、後に日本の大アジア主義の大陸侵略への変質につれて、周作人は大陸浪人や支那通に厳しい批判を行う時期を経て、ついに「芸術家」荷風、潤一郎らの「反近代」や東洋情緒に共鳴するのに至った形成過程に注目してみた。そしてこの過程で、日本人の半世紀に及ぶアジア意識の激しい変動に直面しながら、日本文化に親しむ周作人にはその対日連帯感情も「奮起」、「失望」、「悲哀」という変化があった。けれども中日戦争の直前に至るまで、彼はなお両国は同じア

ジア人であって究極の運命はやはり一致していると考えていた。近代中国における随一の知日家文人としての周作人がその対日連帯感情を長く維持し得るのは、「共栄」の理想ではなく、「共苦」の理念、すなわち「アジア共通の苦しみ」ないし「東洋人の悲哀」という宿命的歴史認識の上での冷静な判断によるものである。これが筆者が指摘しようとするところである。

一

一九四〇年一二月、日本のいわゆる二千六百年の建国記念日の前に、周作人は日本国際文化振興会の招きに応じて「日本之再認識」を書き、それは翌年同会によって単行本化された。その中で自分のこれまでの二十年間の留学体験を基礎にして、文学・芸術から民俗・宗教に及ぶまで、日本文化を観察していく、というアプローチを回顧した後、自らの日本観について次のように概括している。

私はこのように日本を見ている。研究とは言えなければ、けれども若干の理解があったような気がする。私

は当時日本を一つの特異な国として見ず、自分の理解しうるところだけに注意を払い、他の国との相違を見出そうとしたが、結局、他国と近似したところを多くさがしあてた。これはもとより日本の特徴とすることはできないが、しかしそれによって日本の東亜性をつくづく感じたのであった。蓋し政治情勢、家族制度、社会習俗、文字技術の伝統、儒積思想の交流は東アジア各民族の間においては大抵大同小異であるから、ここから着目して見ていけば、おのずと理解しやすいばかりでなく、甚だ有意味でもあると思われたからである。

そして「日本の東亜性」の発見は自分にとってどんな重い意味があるかについて、荷風の『江戸芸術論』にある「而して余は今自己の何たるかを反省すれば……」云々のくだりを引いた後に、彼はこう説明している。

永井氏の言わんとしていることは必ずしも私のそれと全く同じではないかもしれぬ。しかし私はこれを読んで非常に感動した。思うに文学や芸術から全

東洋人の悲哀を感得するのは、文化研究の正道ではないかも知れぬが、亦きはめて面白いことではあるまいか。私は「東京を懐ふ」の一文の中で言っておいたのであるが、今日いかに中国と日本とが敵対的地位に立っていようと、もし一時的關係を離れて永久的性質を論ずる時は、両者はともに生まれながらにして西洋と遙かにその運命と境遇とを異にするところの東洋人なのである。私たちは今日、經驗に限定されて、なお世界の事情に通ずることができないかも知れないが、せめて東洋を知ることができればまあよいとすべきであろう。私たちはこれまで自分の才力の及ばぬことを顧みずに日本文化を議論したのは、実はこの意味に基づくものであって、己を知り彼を知り以て勝を制せんことを求めようというのではなく、「吾も爾もなほ彼のごとし」という王陽明の言葉に感じたためにほかならない。けだし彼を知ろうと求めることは、とりもなほさず己を知ろうとするためでもあるからである。

自らの身体で実感した留学生活をもとにして、個人的

気質上最も関心し愛着する文学・芸術、民俗・宗教の視野から出発、日本を文化伝統において共通する東アジアの一国(特異な国ではない)と見なしその文化における独自性を考察しようとしたが、結局はアジア、とくに中国と共通しあう「東亜性」を見出し、互いに文化的に連帯している運命を痛感した。そして、近代中日両国の国家関係の極めて難しい現実を前にして、彼は政治、外交の問題を配慮しながら、「武化日本」を批判する一方、日本文化の独自の価値をできる限り認め、自らの日本観を打ち建てた。一方、その日本観の根底にあるのはほかではなく、「東亜性」認識の上で維持してきた対日連帯感情なのである。

革命と戦争の錯綜した近代中国に置かれながら、周作人はその一生を通じ、卓越した才能と優れた悟性をもって、文明批評、散文創作、そして日本文化論という文学や思想・文化史上の三つの奇観を造りあげた。もしも文明批評が西欧近代における個人解放の諸文化・芸術の思潮と、王充、李卓吾、愈理初を代表とする中国固有の正統思想ならぬ異端の伝統から思想的な資源を取っているとするなら、散文創作は主としてイギリス流のエッセー

や三千年の歴史のある本国の文章芸術を受け継ぎ、新時代の個性主義精神を取り入れた結果だったと言える。では、彼の日本文化論、つまり日本観はどのように形成されたのか、その日本文化への愛着や、荷風、潤一郎などの文学者がいう「東洋人の悲哀」への共感ないし「吾も爾もなほ彼のごとし」という自己一体的な対日連帯感情はどのような生まれか。それを説明するものとして、恐らく次のいくつかの要点がある。日本留学の経験、個人的性格上の好み(個人の性分)、反清排満の種族革命による民族主義的な復古思想(思古の幽情)などがそうである。ところが、周作人自身はあまり語っていないけれど、実は重要視すべきもう一つの日本と関わっている要素がある。それはすなわち、木山氏がすでに示唆した、明治の半ば頃から「文明開化」における全面的西洋化への反動としての汎アジア主義、および日本の西洋模倣に抵抗する文学上のいわゆる「反近代」的な東洋情緒である。

一九四三年一月、『留日同学会季刊』に寄せた、日本語で書かれた「日本留学の思い出」の中で、周作人は留学時期に実感した明治末年の時代雰囲気についてつぎの

ように追憶している。「私が初めて東京へ行ききましたのは清の光緒三十二年即ち明治三十九年で、ちやうど日露戦争が終わってから一年後でありました。(中略)日本は吾々に二つの大きな影響を与へてくれました。一つは明治維新であり、一つは日露戦争であります。当時中国の知識階級の人達は祖国の危機を痛感し、いかにして国を救ひいかにして西洋各国の侵略より免れ得るかを憂慮したのであります。従って日本の明治維新の成功に鑑み変法自強の道を発見して非常に奮起し、また日本が露西亜との戦ひに勝利を得たことを知り少なからず勇気を増加せしめたのであります。そして西洋に対抗して東亜の保全を計るのは不可能でないことを悟りました。」「もしもこの三十年間に波折が起きなかつたとするならば、これらの感情は現在に至るまで持続され、そしていかなる難問題も速かに解決されたことと思ひます」<sup>(5)</sup>。そこで提起した「明治維新」と「日露戦争」という二つの事件はいずれも、近代日本の社会思想発展に決定的な影響を与えた歴史的な出来事である。明治維新の成功は福沢諭吉の「脱亜」という言葉が象徴したように、日本国民の單純な西欧崇拜や遠心的な西洋文明への憧れを形成させた。

一方、日露戦争の勝利は岡倉天心の「アジアは一つ」という言語が表現したように、日本人の素朴なアジア志向や求心的なアジアへの郷愁をいっそう助長した<sup>(6)</sup>。周作人が強く感じた「奮起」が明治維新から得た理性的な自覚だったといえるなら、「勇氣」はまさに日露戦争により広がる汎アジア主義の時代潮流から受けた感情的な刺激であって、後に彼がもつ東アジアは一つの文化共同体で究極の運命が一致する、という対日連帯感情の基礎となつたものである。

竹内好の『日本のアジア主義』と吉本隆明の『日本のナショナリズム』<sup>(7)</sup>によれば、明治以来の汎アジア主義思潮は三つの発展段階がある。第一段階には明治の半ばごろ、日清、日露戦争の勝利に伴って、ナショナリスティックな情緒が高まりつつ、東亜隣国との連帯意識が国民の間に生まれはじめた。こういう普遍的な民族感情は實際、明治以来、西洋文化の圧倒的な勢力から身を守ろうとする防衛的意識の表現であり、民族主体性の回復あるいは自覚の現れでもある。岡倉天心の『東洋の理想』や樽井藤吉の『大東合邦論』はアジア主義の原形理論として、第一段階の汎アジア主義を代表している。第二段階

は明治末年より昭和初年にかけての時期のことで、孫文の中国革命党と深い関係をもつ宮崎滔天、吉野作造および他の大陸浪人らは中国革命への支援活動を行った。やがて辛亥革命が失敗、日本国内には軍国主義が徐々に台頭し、アジア主義は軍人政治と合流しつつ、反動的方向に向かいはじめた。第三段階の昭和十年から十五年の間には、もともと素朴なアジア志向がついに「東亜協同体論」に変わり、近衛声明の理論根拠と「大東亜共栄圏」のスローガン——侵略主義の空虚な信条となってしまう。この段階の代表的な人物、尾崎秀実の言葉を借りれば、それは日本知識人のための「一個の現代の神話・夢たるに終」<sup>(8)</sup> わらざるをえないものであった。

もし周作人が明治以来の汎アジア主義と何らかの関わりをもったとするならば、それは主として第一段階の思想運動というよりは一個の時代潮流が雰囲気としてあったアジア隣国同士との連帯感情である。しかもそこで受容した連帯感情は政治的なものではなく、周作人にとってはあくまで千年以上の文化交流による習俗、制度、生活様式に共通するところがあって文化的親しみを感じる、といったようなものであろう。すなわち彼が「蓋し政治

情勢、家族制度、社会習俗、文字技術の伝統、儒教思想の交流は東アジア各民族の間においては大抵大同小異であるから」ということに見られるとおりである。アジア主義の原形理論を造り出した岡倉天心が芸術美学、宗教信仰から東洋文明に共通しあう「仁愛」精神を見出し、「アジアは一つ」という発想ができたように、周作人はまず、初期の素朴なアジア主義の連帯感情に刺激を受け、のちに文学・芸術や習俗・信仰から東アジア諸民族の間に一致する文化的「東亜性」を見つけており、中国と日本は両者「ともに生まれながらにして西洋と遙かにその運命と境遇とを異なるところの東洋人」という認識に至ったようである。

しかし、大正時代の末から軍国主義の台頭と経済、貿易の大陸進出に伴い、大アジア主義者や大陸浪人らが初期アジア主義の素朴な理想に背き、その多くは「日本帝國主義によるアジア侵略の先兵」となってしまった。そして朝鮮併呑、大陸侵略の事実を見たことで、周作人が留学時代に受けた汎アジア主義の連帯感情は当の日本人にそれを裏切られることによって、失望か「悲哀」をしか持たないものになってしまった。「もしもこの三十年

間に波折が起きなかつたとするならば……」うんぬんはまさに、自分に対日連帯感情を抱かせた汎アジア主義の変質に対しての遺憾や失望の現れであろう。

こういう失望感は、二十年代に大陸浪人と支那通を批判する文章の中に痛烈に表われている。当時の、北京の漢文新聞紙『順天時報』や『北京週報』に拠っている浪人、支那通、とくにその末流はまさに、辛亥革命失敗後、日本国内には軍国主義が徐々に台頭し、アジア主義は軍人政治と合流しつつ、反動的方向に向かいはじめた、という時代背景の下で生まれたものであり、彼らは日本内閣の対華政策に呼応し、腐敗した中国軍閥政権を擁護しながら、多くの理不尽で不実な暴論を盛んに発表している。周作人は、一九二四年から一九二八年にかけての四年間に、数多くの時評を書き、浪人、支那通が「薄儀出宮事件」「三・一八事件」「李大钊事件」などをめぐって発した暴論や流言に反駁しながら、彼らが中国の保守勢力を護り立てて、ひたすら革新運動を壊すこと、また中国文化と現代中国の革命に無理解、往昔のアジア連帯意識が失われることに対して、絶望の感をいっそう強めた<sup>(9)</sup>。彼はこう言う。「打明けていえば、日本は古代ギリシア

と並んで私の愛する国柄の一つである。日本に関して、私はギリシアの場合と同じくこれといった研究をしていないが、そのあらゆるものが好きなのだ。」「だが私はついに中国人である。中国のものも多くは好きだし、中国の文化もまた多くは私にとり親密で捨て難きものだ。」そして「いかに日本を愛しても、私の意見は結局日本の普通人と大きく隔たり、しかも彼らの言動に対していはば憤怨を感じないではすまぬことになるのである。憤らしいのは私の中国人としての自尊心を傷つけるからだし、怨めしいのは私の日本への憧憬をぐらつかせてしまったから」だ。<sup>(10)</sup>

とはいえ、周作人の対日連帯感情や日本文化への愛着、および東アジアは一つの文化共同体で究極の運命が一致する、という認識は全く無くなつたわけではない。それどころか、現実の危機は彼に中日両国における文化理解の重要性をいっそう感じさせたようである。上記の漢文新聞『順天時報』などに結集している大陸浪人、支那通たちを激しく非難する時でも、日本側の要請に応じて「中日学術協会」や「中日教育会」の設立などに力を尽し、両国の相互理解と相互提携は絶対に必要だというこ

とを強調し続けた。<sup>(11)</sup>

これはいずれも、留学時代に影響を受けた汎アジア主義的な連帯感情に由来するものである。そして一九二四年に発表した「元旦試筆」(『雨天的書』所収)では、さまざまな主義を信じた「五四」時期の、とくに「世界主義」理想の幻滅を経て、自分の思想は今再びアジア主義および民族主義に戻ったと、周作人は宣言した。また一九三一年に友人の『朝鮮童話集』に寄せた序文で、中日・韓三国の文化交流やその重要性を重視する、これまでの姿勢を回顧した後、つぎのように語っている。

朝鮮芸術に関する私の知識は李朝磁器の僅かであり、それも柳宗悦氏の著作から間接的に獲たもので、とても解りにくい芸術である。しかし私は論理上、朝鮮芸術とその価値を重視しており、以前の意見は少しも変わっていない。私は自分の意見がやや迂遠で現実とかけ離れて、「大亜細亜主義」に近く、今の社会実情に合わないかも知れないと知っている。ただ両者(朝鮮が中日の間に文化伝播の役を努めたことと日本研究は中国文化研究に役に立つことを指す。

筆者)はともに事実であることを認めるほかない。中日韓の文化関係も外交紛争も大昔からのことだった。(中略)今は平壤仁川瀋陽錦州の大暴動が起きた直後に、日韓の芸術・文化を調べ、それを理解、鑑賞するのは血気盛んな青年たちにとって難しいかも知れないが、やはり我々が努めるべきことだと思う。<sup>(12)</sup>

まず、注目しておきたいのは、序文を書いた日付が一九三一年一〇月二〇日で、九月一八日の満州事件が起きた一ヶ月ばかり後のこと、そして初めて自分の考えが「大亜細亜主義に近い」と認めたことである。周作人は日本軍国主義者が中国を併呑しようとする現実を無視したわけではないが、文化人、または日本文化を愛着する知日家文人として、彼がアジアで歴史的に形成された「東亜性」やその文化共同体を大切にすることを、現実の民族、国家、戦争という問題から切り離そうとしたことは実に、苦しい選択だったと言わざるをえない。そこに青年時代に汎アジア主義の感化を受け入れて抱くようになった対日連帯感情がいかに彼の日本観に影響を及ぼ



していたかが伺われる。この文化人の理想主義的な姿勢を、のちに書かれた「日本管窺の二」で宿命論的な感慨を込めて次のように表現している。

日本の今昔の生活と現在「非常時」の行動とをよよく考えてみて、私はなお日本と中国は畢竟おなじアジア人であって、盛衰禍福のほどは目下異なるにせよ、究極の運命はやはり一致していることをはっきり見て取るのだ。アジア人はついに淘汰の憂目を免れぬのか、それを思うと茫然となる。衣食住を語ってこんな結論に落ちては、じっさい真暗な宿命論というほかにない。<sup>(13)</sup>

留學以来、日本民族の日常生活に残る、中国南方の庶民の暮らしと似通っている古い民俗、習慣から両国の文化的な共通性を覚え、さらに千年以上の文化交流の歴史から東アジアにおける共通の「東亜性」を見て取り、ついに「同じ東洋人として」の、歴史的に「究極の運命はやはり一致する」連帯意識に至る、というようにして、周作人は日中開戦の直前に、自らの日本観を確立した。

その四十年余りの期間には歴史の変動が激しく、日本の汎アジア主義が「大アジア主義」を経て、徐々に軍国主義に利用され、咄咄人に迫る中国侵略の「大陸政策」に変質してしまった。周作人も二十年代において大陸浪人支那通を厳しく非難しながら、軍国日本の中国侵略の野心をはっきり洞察しており、青年時代から持った連帯感は大いなる幻滅に帰しつつあった。そして日本文化を愛着するが故に、その価値や長所をできるだけ認めて研究に努めたが、知識人の文化研究という空理空論は何にも役立たないことを自覚、一種の「真暗な宿命」を悟った。彼はのちにほかの文章でこの「真暗な宿命」を「東洋人の悲哀」と言い換えている。

## 二

「真暗な宿命」と「東洋人の悲哀」とはそれぞれ潤一郎の『摂陽隨筆』と荷風の『江戸芸術論』から引いたものである。『摂陽隨筆』に収められている「陰翳礼賛」では、潤一郎が日本の民間、とくに関西下町に残っている古い生活習俗、屋根の様式、紙の肌理、器具の色、料理屋の座敷から、歌舞伎の舞台と人形ないし日本人の皮

膚まで、固有の生活にあう「陰翳」と呼ばれている東洋的な美を見出した。「案ずるにわれわれ東洋人は己れの置かれた境遇の中に満足を求め、現状に甘んじようとする風があるので、暗いと云うことに不平を感じず、それは仕方のないものとあきらめてしまい、光線が乏しいなら乏しいなりに、却ってその闇に沈潜し、その中に自らなる美を発見する」と、彼は言う。しかし近代化に伴って、様式と規範が全く違う西洋文化が入り込んで、固有の生活とその美学を急速に破壊しつつあり、潤一郎はその靈魂の不安や文明喪失の悲哀を痛感した。だが、同時に、近代化や西洋文化の歴史的「進歩性」、人類世界に一つの新時代を開く「革新性」を認める以上、彼は、「既に日本が西洋文化の線に沿って歩み出した以上、老人などは置き去りにして勇往邁進するより外には仕方がないが、でもわれわれの皮膚の色が変わらない限り、われわれにだけ課せられた損は永久に背負っていくものと覚悟しなければならぬ」と、考えざるをえなかった。つまり遺伝と革新、歴史と現実、美学と実用との矛盾する状態の中で、彼は東洋人としての暗黒な宿命観を感じていた。

一方、荷風は潤一郎にさきだって、一九〇八年フランスから帰国して以来、文明開化の西洋模倣、旧物破壊、乱雑粗悪な社会改造、いわゆる文明開化の贖物性を、自ら熟知している西洋文明に对照しながら、痛烈な批判を行った。それと同時に、江戸時代の民間文化に残留している古い文化や生活様態を追懐し続けていた。そして「失われた文化にたいする挽歌であるとともに、様式と規範とをなくしてしまった近代日本への痛切な抗議の書」でもある『新帰朝者日記』『冷笑』『江戸芸術論』などを次々と発表した。近代化と土着の、古い生活様態との矛盾をいかにして解消できるか、そしてわれわれはいくら西洋化しても、結局、西洋人のような人間、西洋らしい社会を造ることができるか、という文化改造の根本的な問題を問いかけるにつれて、歴史、遺伝、人種による宿命観をいっそう強く感じた。この点では荷風が潤一郎と共通するところである。荷風はいう。

而して余は今自己の何たるかを反省すれば、余はヴェルハアレンの如く白耳議人にあらずして日本人なりき。生まれながらにして其の運命と境遇とを異

にする東洋人なり。恋愛の至情はいふも更なり、異性に対する凡ての性欲的感覚を以て社会的最大の罪惡となされたる法制を戴くものたり。泣く兒と地頭には勝つ可からざる事を教へられたる人間たり。物云へば唇寒きを知る国民たり。ヴェルハアレンを感奮せしめたる生血滴る羊の美肉と芳醇の葡萄酒と逞しき婦女の画も何かはせん。嗚呼余は浮世絵を愛す。苦界十年親の爲めに身を売りたる遊女が絵姿はわれを泣かしむ。竹格子の窓によりて唯だ茫然と流るゝ水を眺むる芸者の姿はわれを喜ばしむ。夜蕎麦売りの行灯淋し氣に残る川端の夜景はわれを酔はしむ。雨夜の月に啼く時鳥、時雨に散る秋の木の葉、落花の風にかすれ行く鐘の音、行き暮るゝ山路の雪、およそ果敢なく頼りなく望みなく、この世は唯だ夢とのみ訳もなく嗟嘆せしむるもの悉くわれには親し、われには懐かし。

ここで語られているのはまさに、「東洋人の悲哀<sup>(16)</sup>」というものである。同時代の文人・思想家としての周作人が荷風、潤一郎に影響され、あるいは彼らに共感したのは、

おもに反俗的な独立主義の精神、反明治国家の文明批評、伝統への回帰という三点である。<sup>(17)</sup>一方、日本文化を愛着する知日家としての周作人はさらに、二人の遺伝、種族によって悟った「東洋人の悲哀」という宿命観から「同アジア人」としての「究極の運命はやはり一致している」という連帯意識を連想しながら、王陽明式の「吾も爾もなほ彼のごとし」のような自己一体的同情説に感慨を深めた。「日本管窺の二」で周作人は、「谷崎潤一郎が最近出した『摂陽隨筆』の巻頭に「陰翳礼賛」なる一篇があり、漆の椀に味噌汁（味噌でスープをつくり、茄子、大根、わかめ、あるいは豆腐を具にする）を盛ることの意味を説いて、すこぶる氣の利いた答えを出している。其の理由をすべて有色人種というところへ持って行って白色人種とは好みがちがっているのだとするあたりは、いささか宿命観の色合が濃すぎるけれども、全体としてはなかなか面白かった」と感心しながら、「日本と中国は畢竟おなじアジア人であって……」で文を打ち切った。また「日本文化を語る手紙（その二）」では、荷風の例の文章を引いたあと、「私どもが日本文化を研究、理解しあるいは語るその目的は、日本民族を代表する賢哲を

たずねて同じ人類ないし東洋人としての悲哀に耳を傾けようとすることにほかならない」と、告白している。二人の日本文学者がもつ諦観的な東洋情緒は周作人の日本観や対日連帯感情の形成に強く刺激を与えたのに違いない。

三

本文のはじめに、周作人の「東洋人の悲哀」という対日連帯感情はアジア主義の変質により、結局、彼の現実的悲観にしか結びつかず、その「日本研究」も、「賢哲」に代表される文化日本と、「英雄」に代表される軍国日本を统一的に捉えることができず、「精神と歴史を分裂させたまま」中断さざるを得なかった、という木山氏の指摘を紹介した。本文でこれまで述べたように、木山氏の所論は鋭く、研究対象の思想態度と合致している。だが、少し説明して置きたいところがある。それはつまり、「日本研究」が中断せざるを得なかったことは事実であるが、周作人の対日連帯感情が戦争の勃発にもかかわらず、完全になくなったのではない、ということである。例えば、終戦前の一九四四年に、彼は江馬三枝子の民俗

学著作『飛弾の女達』を紹介し、その中に記録している日本中部山村の古い習俗、とくに女性生活に注目した。一見、民俗学に注意を引かれたようだが、しかし、紹介の最後に、周作人は突然、「共苦」、すなわち東洋人共通の苦しみについてこう語っている。

人々はしばしば「アジアは一つ」だと言う。これ  
はもちろん正しい、私もこのように言ったことがある。  
東アジアの文化は一つの共同体であって、その  
運命も一致している、と。しかし、ここに重要な  
は文化の共通性が過去の事実<sup>に</sup>証明されているが、  
現在、それを維持、強化しないと、バラバラになっ  
てしまう可能性がある。運命の一致は事実の証明が  
なければ、空論になりかねず、それでは人々の信頼  
を得られない。いま、最も大切なのは事実に基づい  
て東アジア人共通の「苦」を説明することである。  
こうした「苦」の共通性のうえで東亜団結の基盤を  
作り上げて、ともに「甘」の方向に向かって進むこ  
とにより、はじめていくらか希望が生まれるであろ  
う。日本の詩人や文学者らが以前、東洋人の悲哀や

西洋と遙かにその運命も境遇も異なる東洋人の苦しみをよく口にしたが、私はそれを読んでたいそう感じ入り、それこそ中日文学ないし両国のすべての関係の正しい基調ではなければならぬと思った。そこから出発するならば、接触と調和のいずれも円満にいくだろうが、もし西洋本位の模倣のみに満足するならば、ひるがえって東洋に対しては優越感をしか持たぬことになり、その結果、アジアの事情とかけ離れ、何にもできなくなると思う。<sup>(20)</sup>

中日戦争勃発後、傀儡政権によって差し出された教育督弁（文部大臣）の椅子に就いて以来、周作人は侵略戦争の協力者の立場に立たせられて、「共存共栄」の宣伝に呼応して東アジア共通の「東亜性」をしばしば提起しているのは確かである。しかし、上記の文章は彼がすでに「偽職」を失って、日本軍が太平洋戦争で不利の状況になった一九四四年に書かれたもので、なかでも「もし西洋本位の模倣のみに満足すれば……」と皮肉を言いながら、「共栄」ではなく、彼の言葉で言うと、「共苦」、すなわちアジア共通の苦しみという観点から、自らの立場

を主張している。ゆえにこれを周作人の従来の対日問題観の再提起と見なしてもよいと思われる。そして「日本の詩人や文学者らが以前、東洋人の悲哀や西洋と遙かにその運命も境遇も異なる東洋人の苦しみをよく口にしたが、私はそれを読んでたいそう感じ入り、それは中日文学ないし両国のすべての関係の正しい基調ではなければならぬ」だ、というのはあらためて、荷風、潤一郎らの諦観的な東洋情緒が、彼の汎アジア意識や対日連帯感情の形成に重大な影響と刺激を与えたことを立証している。

まとめてみると、明治末年における汎アジア主義思潮の受容は周作人の日本認識における最初の感情的な基盤となる、そして日本のアジア主義の変質に伴って、彼の対日感情は大いに幻滅させられたが、荷風、潤一郎らに代表される日本文学者の反近代思想や伝統帰りに含まれる東洋情緒の刺激を受け、彼は自らの対日連帯感情とその日本観を最終的に確立し、しかも晩年まで持ち続けた。そしてその連帯感情が一貫して維持され得たのはほかでもなく、彼の「共苦」という冷静な判断によるものである、といえよう。こうした対日連帯感情における複雑な

形成過程を通して、筆者は近代における中日両国の悲惨な歴史を痛感する一方、周作人がやはり文人であり、荷風、潤一郎との関係が深く、その心底に共通の文人素養や思想意識があった、と強く感じている。

- (1) 福田恒存「反近代の思想・解説」(『現代日本思想大系32』の「反近代の思想」所収、筑摩書房、一九六五) 参照。
- (2) 『北京苦住庵記』(筑摩書房、一九七八) 35〜36ページ参照。
- (3) 『薬味集』所収、一九四二年。松枝茂夫の訳文参照。
- (4) 「日本の衣食住」参照、『苦竹雜記』所収、一九三六年。
- (5) 方紀生編『周作人先生のこと』から引用、風光館、一九四四年。
- (6) 橋川文三「福沢諭吉と岡倉天心」参照、『近代日本と中国』上巻所収、朝日新聞社、一九七四年。
- (7) 竹内の文は『竹内好評論集』第3巻所収、筑摩書房、一九六六年。吉本の文は「現代日本思想大系4」の『ナシヨナリズム』所収。筑摩書房、一九六四年。
- (8) 『竹内好評論集』第3巻参照。
- (9) 周作人の大陸浪人と支那通に対する批判の詳細について、拙稿「周作人、日本観の一断面——大陸浪人と支那通に対する批判をめぐって——」(『一橋研究』第19巻第4号) 参照。

- (10) 「日本浪人と『順天時報』」、「談虎集」所収、一九二五年、木山英雄訳。
- (11) 「中日教育協会啓示」(『語絲』雜誌第93号掲載、一九二六、文集末収)、「日本与中国」(『談虎集』所収) など参照。
- (12) 『朝鮮童話集序』、『看雲集』所収、一九三二年。
- (13) 『苦茶隨筆』所収、一九三五年。木山英雄訳。
- (14) 『谷崎潤一郎全集』第20巻、中央公論社、昭和三十四年。
- (15) 『荷風全集』第14巻11ページ。岩波書店、昭和三十九年。

(16) ところで、「東洋人の悲哀」の最初の出典は荷風の『冷笑』第12章「夜の三味線」にある。主人公の紅雨は西洋と東洋の音楽とその違いを比べる際に、こう語っている。

日本の音楽は末代になった江戸の俗曲に於てさへも一ツとして仏教と交渉のないものはない。音楽は其節付からよりも己に東洋人の声柄からして仏教の読経に等しい処があり、又琴三絃笛鼓の如き器樂が伝へる音調も同じやうに、不動静止の暗澹たる悲哀以外に何等其他の感情を動かす能力を有して居らぬ。此の暗澹たる東洋的悲哀は幾代となき遺傳的思想の修養を経て来たものに非ずんば到底解釈せられぬものである。其の空気の中に生まれて其空気の中に生きている吾々は唯沈黙しかかる悲哀の存在を承認すればそれでよい。(『荷風全集』第4巻、岩

波書店、昭和三十八年)

(17) 拙稿「周作人と永井荷風・谷崎潤一郎——反俗・伝統  
回帰・東洋人の悲哀——」(『中国研究月報』579号)参照。

(18) 「日本管窺之二」、『苦竹雜記』所収、一九三五年。木  
山英雄訳。

(19) 「談日本文化書(其二)」、『瓜豆集』所収、一九三六年。

木山英雄訳。

(20) 「草園与茅屋」、『苦口甘口』所収、一九四四年。

〔一九九九年三月十日 受稿〕  
〔一九九九年五月十日 受理〕

(日本大学講師)